

故齋藤憐さん 10月12日  
死去、享年70歳

## 元ジャテックの劇作家 齋藤憐の死を悼んで

本野 義雄

テレビドラマには例のない斬新な企画だと、二人とも確信していた。

10日ほどして、私は編成局の担当者呼び出された。

「この企画はなかなか面白い」と、彼は度の強い眼鏡越しに言った。「正規の編成会議にかけてもいい。但し、脚本は無名の作家じゃだめだ。〇〇を起用しよう」

彼は、当時売れっ子だったある脚本家の名前をあげた。私は、脚本は新人の齋藤憐でなければ絶対にだめだと主張した。話は壊れた。憐さん呼び出し、委細を話して謝った。

「本野さん、われわれは楽しい夢を見ていたんですよ」憐さんは、そう言って一笑した。その数年後、憐さんの『上海パンスキング』が大ヒットし、岸田国士戯曲賞が与えられた。私はあの編成マンを見返してやれたような気がして、嬉しかった。

### 『となりに脱走兵がいた時代』の出版

憐さんは花形劇作家になり、私も外国取材が多くなった。会う機会が少なくなった。私は彼にジャテックの活動をテーマにした戯曲を書いてほしかったので、あるパーティで同席したとき、その気はないか尋ねてみたが、答えは否定的だった。その頃の彼は同時に数本の作品を執筆しており、先に渡って幾つもの予定がまわっているようだった。

90年代半ば、ジャテック運動の詳細な記録を作ろうという計画が軌道に乗り、連絡がと

1969年、ベトナム戦争が激化する中で、私たちジャテック(注1)の活動は多忙を極めていた。保護を求める脱走米兵は毎週のように現われ、彼らへのインタビュー、移送手段と人員の確保、ベッドと食事を提供してくれる家庭探しに追われる毎日だった。

知人伝いに、ある演劇青年のグループが参加してくれると聞き、早速連絡を取って会うことにした。場所は多分赤坂の喫茶店だったろう。現われたのはヒョロリと痩せて背が高く、眼のギョロツとした若者で、笑うと顔中が人なつこく一変するのが印象的だった。

後に憐さんが書いた回想記(注2)によれば、当時彼は28歳、後の演出家串田和美・佐藤信両氏と共に「自由劇場」という小劇場を発足させたばかりで、食うや食わずの生活だったようだ。最初に預けたPという脱走兵を連れて行ったのは、新大久保のせまい6畳一間のアパートだった(彼の回想記によれば、そこは串田和美さんの仕事場だったという)。

Pは多くの脱走兵がそうだったように、麻薬中毒者だった。「軍隊を脱走し政治亡命を認めない異国の地に浮遊している彼にとって、

麻薬の罪など国家反逆罪に比べたらいかほどのものであったろう」と憐さんは書いている。

Pは3〜4週間私たちの保護下にあつたが、ある日忽然としていなくなってしまった(これも当時よくあるケースだった)。憐さんたちの努力は無駄になったように見えたが、彼は厭な顔も見せず次々に私たちが連れて行く新しい脱走兵の面倒をみてくれた。

### ドキュメント・ドラマを夢見て

71年頃から、ジャテックの方針転換(脱走兵保護から反戦米兵支援に重点を移す)もあつて、脱走兵関連の仕事は次第に少なくなった。その頃私が引越した西大久保のマンションに、近くに住んでいた憐さんがよく遊びに来て将棋を指した。私が勝つことが多く、その度に彼は口惜しがった。

75年頃だったか、私は勤務先のテレビ局で東南アジアへの日本の経済進出をテーマにした「ドキュメンタリー・ドラマ」を企画し、憐さんに協力を求めた。二人で赤坂の東急ホテルに泊り込み、徹夜して原稿用紙20〜30枚のシノプシス(梗概)を作り上げた。当時の

れる関係者すべてに原稿を依頼した。憐さんも快く応じてくれ、「死ぬのが怖かった若者たち」という素晴らしい文章を寄稿してくれた。編集に2年あまりをかけて出来上がった本は2段組で650ページを越える大冊となり、『となりに脱走兵がいた時代』という題がつけられた(思想の科学社刊、在庫あり)。憐さんがこの本を熟読して構想を練ったことは確かだ。2000年、彼から『お隣りの脱走兵』という芝居を上演するから協力してほしい、との連絡が入った。願ってもない申し出だった。

## 『お隣りの脱走兵』という芝居

東京の新興住宅地にある中流家庭檜山家にある日、大学生の一人息子がジャズ喫茶で知り合った白人青年を連れて来る。その青年がベトナム行きから逃げた脱走兵とわかって、一家は大騒ぎ。知り合いのジャズテック活動家と呼んで引き取ってもらおうとするが、ジャズテックもいま手一杯で引き取る余裕がないと言われ、やむなく数日預ることになる。片言の英語まじりで暮らす緊張の日々のうちに、家族は次第に変貌して行く。

憐さんの『お隣りの脱走兵』(而立書房刊、在庫あり)は、喜劇的な場面を縦横に折込みながら、当時私たちが直面した厄介でデリケートな多くの問題を見事に再現している。そればかりか、隣りの電器屋の主人が度々新製品の売り込みに現われる場面を通じて、経

済成長の真只中にあつた当時の世相も描いた。短い台詞によって、国家と市民、歴史と個人の関係についても言及している。

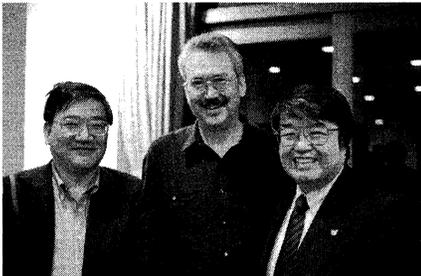
清家 ジャズテックには組織なんてありません。純一 組織がない？  
清家 強いて言えば、あなたがジャズテックです。

純一(飛び上がった) ええ、私が? 入会してない私がどうしてジャズテックなんだ?  
清家 ジャズテックには会員名簿も規約もありません。脱走兵と関わりを持った者がジャズテックです。

このやりとりが観客に与えた驚きの効果を、今もはっきりと思ひ出す。これこそは、私たちが当時主張していた運動原理だった。

## 舞台から元脱走兵が挨拶

高橋武智と私は度々稽古場に足を運び、体験者として出演者やスタッフの質問に答えたり、意見を述べたりした。それ以上に私たちができた貢献は、憐さんの依頼に応え



歓迎パーティでのJ・F・ロウ(中央、2001年6月18日撮影・巨島聡)

て米国から生身の元脱走兵を呼び寄せたことだろう。

当時来栖というコード名で呼ばれていたジョン・フィリップ・ロウは、2年間ジャズテックの保護下におかれた後、偽造パスポートによる非合法出国者第1号として70年、パリに脱出(注3)。4年後恩赦により故国に帰り、医学を学んで医師になった。日本の土を踏むのは30年ぶり、何十人ものかつてのジャズテックのメンバーとさまざまな感動的な再会があった。01年6月、紀伊国屋ホールでの『お隣りの脱走兵』公演初日と2日目、彼はカーテンコールに登場して舞台から「私が当時の脱走兵です」と挨拶した。それまで舞台上のお芝居と想っていた観客に、それが現実にあったことなのだという実感を与えたのである。(来栖の再来日と歓迎パーティの様子は当時の朝日新聞にも大きく報じられた)。

憐さんはその後も多くの戯曲を書き、数々の受賞に輝いた。元ジャズテック同志として、心からご冥福を祈る。合掌。

(もとの・よしお/本誌編集委員)

【注1】ベ平連運動の一環として67〜75年に展開された、市民による反戦脱走兵援助運動。

【注2】「死ぬのが怖かった若者たち」、思想の科学社刊『となりに脱走兵がいた時代』所収。

【注3】高橋武智「私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた——ベ平連/ジャズテック、最後の密出国作戦の回想」(作品社刊、2007年、在庫あり)に詳しい。